高尾山山頂から発信！

のぶすま

「のぶすま」とは
ムササビの古い呼び名です。

季刊 vol.49
2017年 秋号

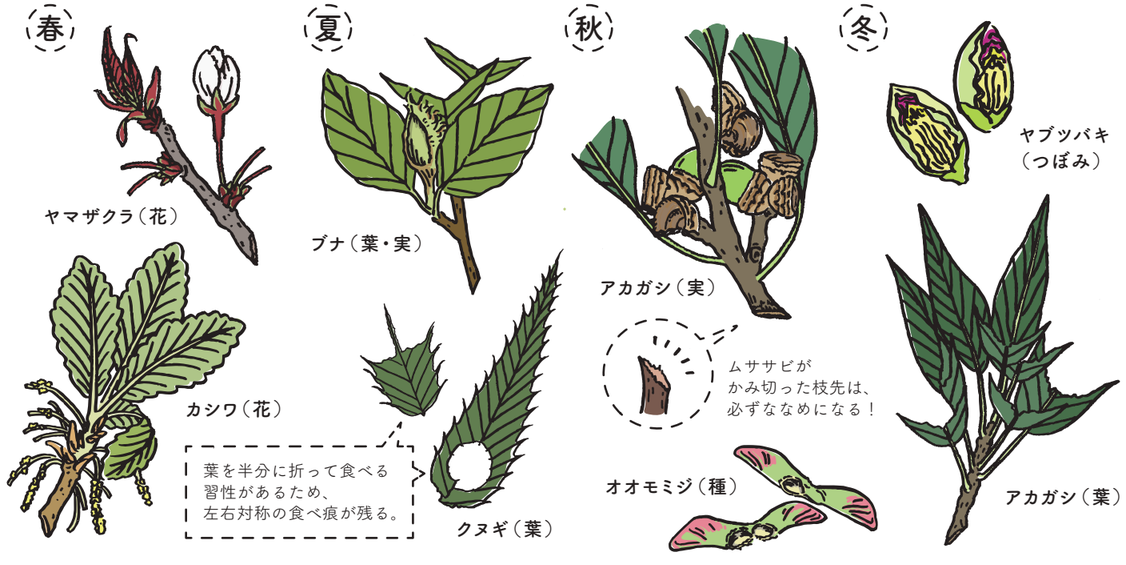
ムササビのごはん

夜な夜な、ごはんを求め
高尾の森を飛び回っているムササビ。
一生のほとんどを木の上で過ごす彼らは、
主に樹上の「植物」を食べて暮らしています。

約1600種の植物があると言われている高尾山で、
一体どのようなものを選んで食べているのでしょう？？

ムササビの食遍歴

ムササビが何を食べて暮らしているのか、それを調べる一番の方法は、彼らが残した「食痕」を探すこと。
冬眠をしないムササビは、一年を通じて様々な樹種・部位を食べていることがわかります。



植田孟縉（うえだもうしん）という人の魅力

～「昔の人々も魅せられたムササビ」のおまけ～

植田孟縉は八王子の武士集団「八王子千人同心」の一員でした。

『新編武蔵（むさし）風土記稿』『新編相模（さがみ）風土記稿』といった幕府による地誌製作に従事しただけでなく、『武蔵名勝図会』『日光山志』『鎌倉攬勝（らんしょう）考』といった各地の名所や見どころ、歴史や自然などをまとめた書籍を自ら著作しました。

書籍の多くが幕府の教学施設「昌平坂（しょうへいざか）学問所」に納められたことから、孟縉が優れた著作者だったことがうかがえます。

『新編武蔵風土記稿』に携わったのが57歳（数え年）、『日光山志』が幕府の許可を得て出版されたのが81歳の時、87歳で没するその時まで、その探求心と情熱は衰えることがありませんでした。

渡辺崋山（わたなべかざん）に師事していた孟縉による緻密な挿絵は、当時の様子を生き生きと今に伝えています。

\FUN FUN/ たかおさん

「頼れる高尾の大木」の巻

「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて準備しております。ご希望の方はビジターセンター窓口までお越し下さい。

解説員こらむ vol.11

高尾山とつきあう

「なにを撮っているのですか？」。高尾山で写真を撮っていると、良く聞かれる言葉がこれ。何か珍しい花でもあるのか聞いてみたいのだろう。このように聞いてくる人はカメラを持っていることが多く、自分も珍しい花の写真を撮りたいのかもしれない。

私の場合は、昆虫の写真を撮っていることが多い。最近は趣味で、特にカミキリムシとチョウの幼虫を撮っている。なぜ、カミキリムシ、なぜ、チョウの幼虫と聞かれても明確な答えを持っていないが、ただ好きなのだ。

カミキリムシもそうだが、チョウの幼虫も見つけるのが甚だ難しい。そんな強敵を、食草（幼虫が食べる植物）を見つけ出し、食べ痕を観察して、幼虫の大きさを想像する。頭の中に像を結び、その姿を追って見つけ出す。うまく見つけたときの感激が、次のターゲットを追いかける原動力になっているのかもしれない。

幼虫が見つかったら撮影である。うまく撮れたときはビールで乾杯、だめなときはカメラのせいにして少し溜飲を下げている。

高尾山とのつきあい方はさまざまであるが、私はカメラと昆虫で高尾山とつきあいたいと願っている。これからもよろしく。

〈解説員　八木下〉

季刊高尾ビジターセンターニュースレター「のぶすま」2017年秋号 vol.49
東京都高尾ビジターセンター自然解説員作成　2017年10月1日発行
所在地：〒193-0844 東京都八王子市高尾町2176　電話：042-664-7872　FAX：042-662-9926
URL：http://takaovc599.ec-net.jp（カラー版最新号を閲覧できます）

ムササビの１年間の献立表 ～高尾ビジターセンター解説員調査結果～

〈2008 年 4 月～2009 年 3 月 /2017 年 1 月～2017 年 9 月の食痕調査記録から〉

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
イヌブナ	✿🍃	🍃	🍃									◎
ブナ	✿🍃		○	🍃○	○	○						
ヤマザクラ	✿		🍃○						◎			
オオシマザクラ	△🍃		○									
クマシデ	✿											
コナラ	✿🍃	✿🍃		🍃○	🍃○	🍃○	○			◎	◎	△
オオウラジロノキ	✿🍃											
アサダ	✿											
モミ	花芽				○					🍃		
カシワ	✿	✿🍃										
クヌギ	✿	✿🍃	🍃	🍃	🍃○	🍃○						△
ウラジロガシ		✿🍃								🍃		
アカガシ		✿🍃			○	○				🍃	🍃	🍃
イロハモミジ		✿				○	○	○	◎			
ウラジロノキ		✿🍃	🍃○				○					
トチノキ		🍃				○	○					
シラカシ		🍃							🍃	◎		
ケヤキ				🍃		○				◎		
イヌシデ				🍃○								
ヌルデ				🍃								
アカシデ				🍃	🍃							
オオモミジ					○	🍃○						
コガシワ					○							
スギ					○				花芽	◎	◎	◎
ミズキ					🍃							
ヤブツバキ					○			△		✿△		△
カヤ					○	○	○					
カジカエデ											○	
マツグミ									🍃	🍃○	○	🍃○

△＝つぼみ、✿＝花、🍃＝葉、◎＝芽、○＝実・種

調査してわかったこと

見つかった食痕の樹種数 29 種

今回の調査結果だけでも、見つかった食痕の樹種数は 29 種！
さらに、その被食部位も様々であり、春には花や若葉、秋には実や種など、季節ごとの傾向がはっきりとみて取れます。調査は主に１号路で行ったため、他のコースも含めれば、もっと樹種数は増えそうです！

お気に入りのごはん場がある

記録を取っていると、かなりの高確率で食痕が見つかるスポットがあることに気づきます。
理由は、そこにお気に入りの樹があることはもちろんですが、他にも巣穴が近くにあったり、枝にとまりやすいといったこともありそう。

解説員が注目した食痕ベスト２

①ブナの実
高尾山内に、およそ ※80 本程しか生え残っていないと言われているブナ。しかし、その本数の少なさに対して、見つかる食痕の数が圧倒的に多い！ムササビの好物に違いないので、高尾山のブナの繁栄と存続を願うばかりです。
※平成９年発行「わたしの高尾山（高尾山自然保護実行委員会編）」参照

②ツバキのつぼみ
樹高が低く、ムササビにとってはかなりとまりにくいだろうと思うのですが、毎年冬にたくさんの食痕が見つかります。ごはんが少ない冬に、欠かせない貴重な栄養源なのでしょう。

まとめ

冒頭でも書いたように、高尾山で暮らすムササビはとってもグルメです。季節ごとに食べている樹種や部位が変わり、今回行った食痕調査も、まるで森の旬のお品書きを受け取っているようでとても楽しかったです。この秋号を作成している９月は、若い緑色のドングリやカエデの種などをよく食べています。生えている樹種が限られた環境でも、ムササビが生息している場所は確かにありますが、それでも時に好みの傾向を見せる彼らにとって、これだけ食べ物の選択肢のある高尾山は、暮らしやすい環境と言えるのではないかと思います。

〈解説員　梅田〉

高尾山のれきし vol.11

昔の人々も魅せられたムササビ

夜に姿を現し、宙を滑空する。その愛嬌と風変りな生態が人気を博しているムササビ。昔の人々もミステリアスな印象を抱きつつも、その存在を意識せずにはいられなかったようです。

ムササビは古くから知られていて、平安時代中頃の万葉集にも登場します。同時代の漢和辞書『和名類聚抄』には、〝夜に空を飛び、赤子の泣き声のように鳴き、火を喰らう〟とあります。闇夜の山野に活動する様子は、物の怪のごとく映っていたようです。

高尾山のムササビはどうだったのでしょう？江戸時代の多摩地域の地誌『武蔵名勝図会』（全12巻，1820年）において、著者の植田孟縉は、ムササビの生態や社会との関連を次のように記していて、当時のムササビへの印象や理解、習慣を推し量ることができます。

〝日中は大杉の洞に棲み、日没後に洞から飛び出す。夜間に活動、飛行して、寝ている鳥を捕食する。薬王院では、奉納された鶏や境内の鳩を食べられてしまったという。〟

〝（栃木県の）日光にも棲んでいて、洞のある大杉を叩くと猫のような顔を洞からのぞかせる。〟〝ムササビの大きいのをモモンガと呼ぶ。モモンガは尾を頭にかぶせて人を驚かす。子どもの遊びに、服の襟を頭にかぶって「モングワァ」と叫んで驚かすものがある。これはこの獣に由来する。〟

また、挿絵には大杉の洞からムササビが顔をのぞかせている様子と、月夜の宙を滑空する姿が描かれています。

詳細な説明だけでなく挿絵をつけてまで紹介しているところに、著者のムササビへの興味深さを感じさせます。霊山である高尾山の神秘さと、ムササビの奇妙さとが相まって、著者の好奇心を一層強くしたのかも知れません。

書物の紹介から約200年後の現代、高尾山には代を重ねたムササビが暮らし続けています。そして、私たちもまた、イメージこそ変貌しましたが、ムササビへの興味を持ち続けています。

これからさらに先の未来も、ムササビと、ムササビへ興味を向けることのできる私たちがいる、そんな高尾山であり続けたいものです。

〈解説員　藤野〉

解説員のいちおし vol.7

ツリフネソウ

弾ける種（実）に何度でもびっくり！

花の形もユニークですが、私のイチオシはその種（実）です。熟した実はほんの少し触れただけで破裂するように弾け、中から種が飛び出す仕組み。その力強い弾けっぷりは毎回声をあげてしまうほど。

見られる時期：7月～9月（花）9月～11月（実・種）
見られる場所：1号路、日影沢などの湿った場所

〈解説員　宇井〉